

学 力 確 認 の 結 果 の 要 旨

報告番号	保 論 第 4 号		氏 名	淀川 尚子
審査委員	主 査	中尾 優子		
	副 査	山下 亜矢子	副 査	宮田 昌明
	副 査	牧迫 飛雄馬	副 査	田平 隆行

主査及び副査の5名は、令和4年8月18日9：00～10：00に、学位請求者淀川尚子に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。

具体的には、以下のような質疑応答がなされ、いずれについても満足すべき回答を得ることができた。

【質問1】研究の限界と今後の課題に記載されている嫌いな食品という嫌悪感と食物新奇性恐怖の関係について説明せよ。

回答_食物新奇性恐怖と好き嫌いの関係について、先行研究では異なる概念として取り扱われている。しかし、高い相関を示す報告もある。2歳頃から6歳頃までが食物新奇性恐怖のピークとされ、その後、一部が好き嫌いへ定着するとの考えもある。また、食物新奇性恐怖は食品との出会いの場において食品の外観や香りに反応を示すとされ、好き嫌いは口腔期の食感や味に対する反応とする考えもある。

【質問2】食物新奇性恐怖の尺度は使用されているものか海外の文献を用いてあるが、国内における信頼性と妥当性について説明せよ。

回答_国内で同じ尺度を用いた研究はなく、国内の類似する尺度も参考に翻訳して使用した。尺度の各項目は、先行研究の結果と相関があり、結果が大きく歪むことはないと考えた。

【質問3】MNAにタンパク質項目が含まれているが、なぜタンパク質の摂取頻度を用いたのか説明せよ。

回答_MNAには一部タンパク質の摂取頻度が含まれているが、高齢者のタンパク質摂取は、低栄養予防の観点から重視されていることやその影響を明確にするためにモデルに用いた。しかし、本結果では関連がみられなかった。今回、食事評価法の摂取頻度を用いたが、特に高齢者の場合は1回に摂取する量を半定量式で写真や図に示すなどして調査すると、より精度が高まると考えている。また、食事記録法や写真撮影法による調査方法を検討する必要があると考える。

【質問4】食物新奇性尺度の下位項目の構成について、新規食品への反応なのか。項目の例を挙げて説明せよ。また、食経験に依存すると思うがそれについてはどのように考えるか。

回答_「会食で目新しい食べ物があると、試してみたくなる」等、新規食品への反応に加え、食材は同じでも外観や風味の違う料理であれば新規と捉えられると考える。先行研究で食物新奇性恐怖の都市部と地方比較では、地方が有意に高いことが示されており、食経験の違いは影響すると考える。

【質問5】研究対象者のリクルートの方法について説明せよ。

回答_調査対象地域の保健センターが連携する老人会の代表者会議で、研究の趣旨を説明し、協力を依頼した。協力が得られた老人会グループの地域活動の現場を訪問して実施した。

【質問6】武井器機のODKの測定器機について、パタカの回数であれば聞き取って測定する方法も可能と考えるが、器機を使用するメリットについて説明せよ。

回答_聞き取りペンで紙に連打する方法もあるが、器機はクリアな発音を拾うため、測定誤差が生じないように使用した。また、調査時の対象者の反応も良く、協力度が増し、その後の口腔機能訓練に繋げる上での動機付けとしても有効であると考えた。

【質問7】食物新奇性恐怖はエイジングで変化するのか。食物新奇性恐怖が中年期以降に変化することであれば、本研究をどのように活かしていくのか。

回答_先行研究からも変化すると考えている。しかし、小児と高齢者は様相が違う可能性があり、同

スケールでの比較は難しいことから、慎重に検討する必要があると考える。食物新奇性恐怖の測定方法について、今回は質問紙を用いたが、実際の食品を用いる方法もあり、検討していきたいと考える。今後、歯科の臨床の現場で高齢者の食生活指導への反応やアドヒアランスが不良の場合は、嗜好の問題を疑い介入する。また、地域での介護予防等の活動において、低栄養のハイリスク者への介入時のアセスメントに活用していくなど、具体的な介入方法についても検討していきたい。

【質問8】DVSは、食の多様性を評価するものである。本研究ではタンパク質の摂取頻度で分析されているが、その妥当性について説明せよ。また、タンパク質以外の食品については検討していないのか。

回答_栄養調査法で摂取頻度や各項目は汎用されており、先行研究にも類似するものがあつた。しかし、関連がないという本結果から、特に高齢者においては、より精緻化した調査法の検討が必要であるとする。また、今回はタンパク質に焦点をあてたため、その他の食品については分析していない。

【質問9】食物新奇性恐怖の記述統計量について、分散が大きく、2群の各分散に差がみられる。その要因についてはどのように考えるか。また、外れ値についてはどのように取り扱ったか。

回答_栄養状態良好群の分散が大きく、食物新奇性嗜好(Food neophilia)がある一定数存在することから、その影響についても考えてみたい。分散については、先行研究でも同様の傾向が示されており、今回は外れ値に対するコントロールは行っていないが、解釈については慎重に行いたいと考える。

【質問10】表3のロジスティック回帰分析について、ステップワイズ法で分析されたものか。

回答_ステップワイズ法を用いている。結果、タンパク質の摂取頻度および歯数については除外されたため、表3には有意な変数のみ記載している。

【質問11】家族構成について調査してあるが、独居とそれ以外の影響についてはどのように考えるか。

回答_先行研究で独居と低栄養の関連は多く報告されている一方で、独居でも共食機会の頻度が影響するとの報告もある。前述したことを踏まえて、独居の影響についても検討していきたい。

【質問12】高齢者の食物新奇性恐怖の有無で比較すると、よりその特性や概念が明確になり、興味深い結果になると思うが、それについてはどのように考えるか。

回答_今回は低栄養との関連に焦点を当て実施していないが、最初のステップとして高齢者の食物新奇性恐怖の特性についても精査する必要があると、検討していきたいと考える。

【質問13】口腔機能に関連して、咬合状態や歯周病検査などのより専門的な調査も加えては如何か。

回答_今回は咬合状態や歯周検査については調査していないが、口腔機能に関連する重要な項目なので、今後の展開として詳細な口腔内の状況も加えて検討していきたいと考える。

【質問14】対象集団の基礎疾患について循環器疾患の割合が高いのに対し、脳血管疾患の割合は低い傾向にあるが、それについてはどのように考えるか。

回答_循環器疾患には治療中の高血圧が含まれているため、割合が高い結果となっている。

【質問15】食物新奇性恐怖について小児期から高齢期へと縦断的に調査をされた先行研究はあるのか。また、それぞれのアプローチ法について説明せよ。

回答_ライフステージを通した縦断研究はなく比較が難しいが、2~6歳頃をピークに食経験と共に減少し、20代から高齢期にかけての調査で加齢と共に上昇が示されている。乳幼児には共食場面で多様な食物を摂取する家族のモデリング効果や暴露の機会を増やすこと、保育園などでの友人のモデリング効果も報告されている。高齢者は食品の情報を提供することで食品との親和性が高まると考える。

【質問16】Food neophobiaとFood neophilia、variety seekingの3つが重要とされているが、この3つの概念について本調査では取り扱われているか。

回答_今回はFood neophobiaにのみ焦点を当てたため、Food neophiliaとvariety seekingについてはFood neophobiaと同様に興味深い食への行動特性であり、解決への糸口として検討したいと考える。

以上の結果から、5名の審査委員は本人が大学院博士課程修了者と同等の学力と識見を十分に具備しているものと判断し、博士(保健学)の学位を与えるに足る資格をもつものと認めた。